

第1章 流域の自然状況

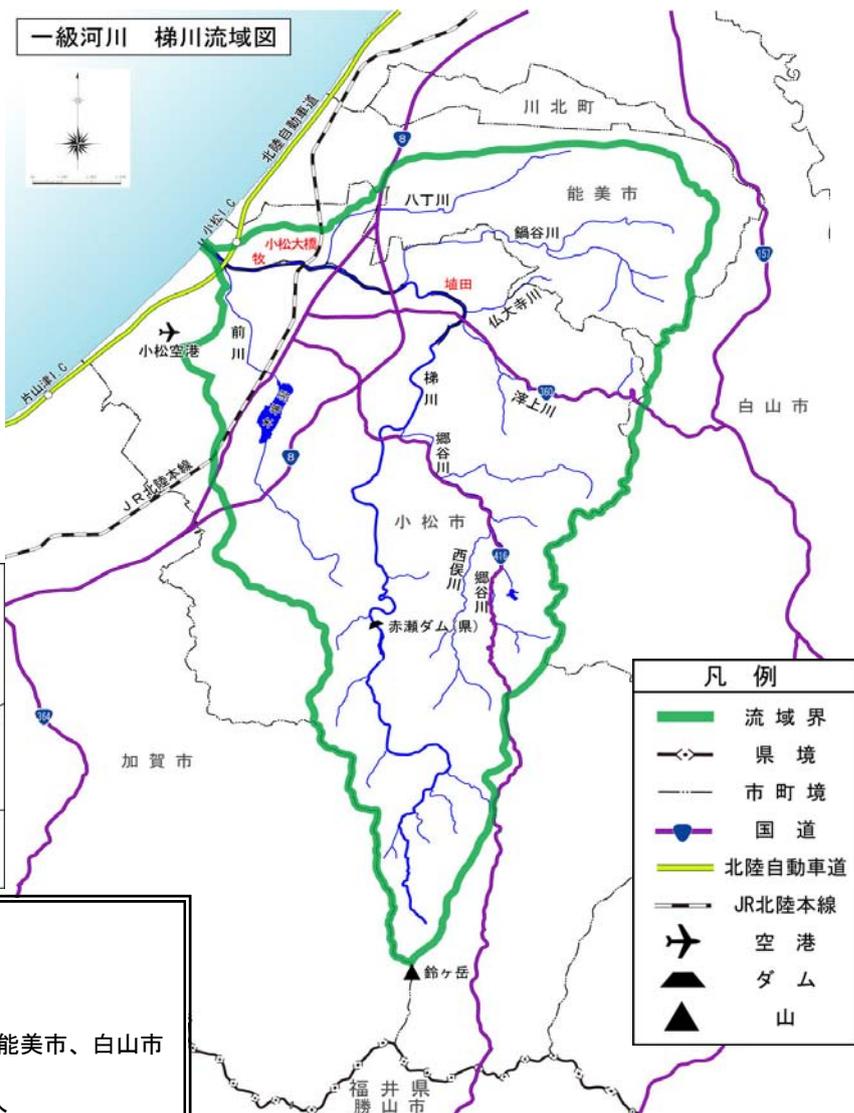
1-1 流域及び河川の概要

梯川は、その源を石川県小松市の鈴ヶ岳(標高1,175m)に発し、山間部を北流して能美・江沼丘陵に入り、金野町で郷谷川、軽海町で湊上川、仏大寺川を合わせたのち、流れを西へ転じて平野部に入る。その後、手取川と梯川とによって形成された扇状地を西に蛇行し、鍋谷川と八丁川を合せつつ小松市街地を貫流し、河口付近で木場瀧より流れ出る前川を合せて日本海へ注ぐ、幹川流路延長42km、流域面積271km²の一級河川である。

流域は、石川県小松市、能美市、白山市の3市からなり、流域の土地利用は、山地等が約70%、水田や畑地等の農地が約20%、宅地等の市街地が約10%となっている。

氾濫域の下流部には、石川県第三の都市である小松市をはじめ能美市があり、繊維、機械等の第二次産業が集積し、石川県の工業生産拠点として発展している。沿川には、小松空港、北陸自動車道、国道8号、JR北陸本線など重要な広域交通網が集中しており、関西、北陸の各圏域を結ぶ基幹交通のネットワークが形成されている。また、縄文、弥生時代等の遺跡、歌舞伎の勧進帳等で知られる安宅の関、加賀藩三代藩主前田利常により創建された小松天満宮や小松城等の史跡・文化財、特徴的な伝統産業として九谷焼の生産など、石川県加賀地域の社会・経済・文化の基盤をなしている。

さらに、流域内には、郷谷川上流が獅子吼・手取県立自然公園、観音下や鈴ヶ岳が県自然環境保全地域に指定されており、荒俣峡等の景勝地がみられるなど豊かな自然環境・河川景観に恵まれている。また、梯川の水は古くから農業用水として利用されているとともに、国営加賀三湖干拓建設事業等に伴う農業用水や発電用水が手取川水系大日川からの流域変更により供給されている。このように本水系の治水・利水・環境についての意義は極めて大きい。



【流域の諸元】	
流域面積	: 271km ²
幹川流路延長	: 42km
流域内人口	: 11.2万人
主な市	: 小松市、能美市、白山市
想定氾濫区域面積	: 39km ²
想定氾濫区域内人口	: 約5.3万人
想定氾濫区域資産額	: 約9,600億円

図1-1 梯川流域図

1-2 地形

流域の地形は、上流部では鈴ヶ岳、大日山等の1,000m級の山々が壮年期の山地地形を造り、河川が急峻なV字谷を形成している一方、中・下流部の能美・江沼丘陵や大杉谷下流等では、河岸段丘による平坦地もみられ、水田としても利用されている。軽海地先より下流には、低湿な沖積平野に小松市街地が広がり、その沖積平野の南西に海跡湖の木場潟があり、海岸沿いに高さ10~20mの海岸砂丘が発達している。

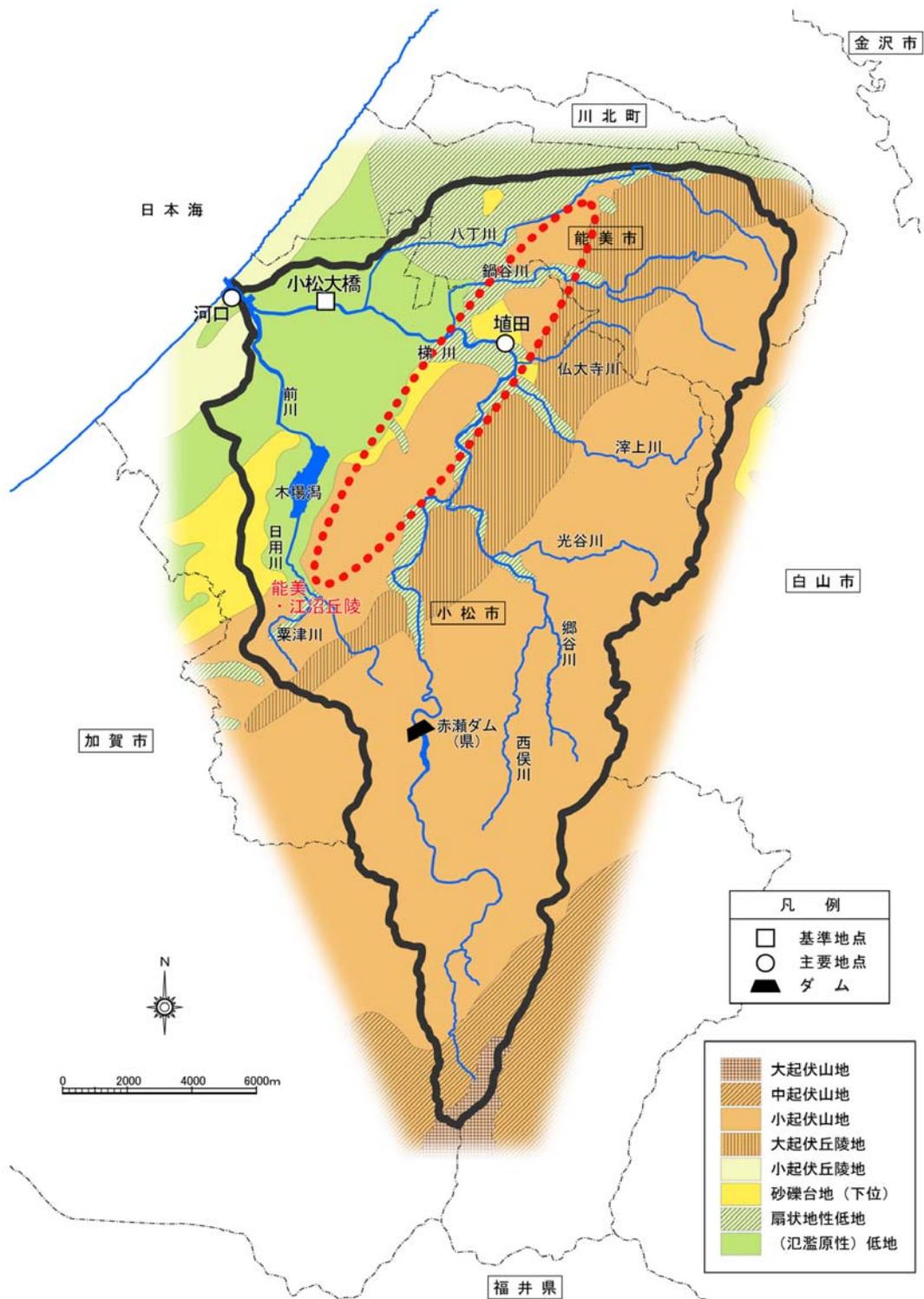


図 1-2 梯川流域地形図

出典：土地分類図（石川県）昭和49年 日本地図センター

1-3 地質

流域の地質は、上流部の山地では新第三紀中新世に属する火山性岩石が分布し、安山岩類もみられる。上・中流部の能美・江沼丘陵では、洪積世の砂礫からなる堆積物や新第三紀層の流紋岩類が広く分布している。また、下流部では海岸沿いに砂丘が形成され、平野には砂礫や泥などの未固結堆積物が厚く堆積した沖積層が広がっている。

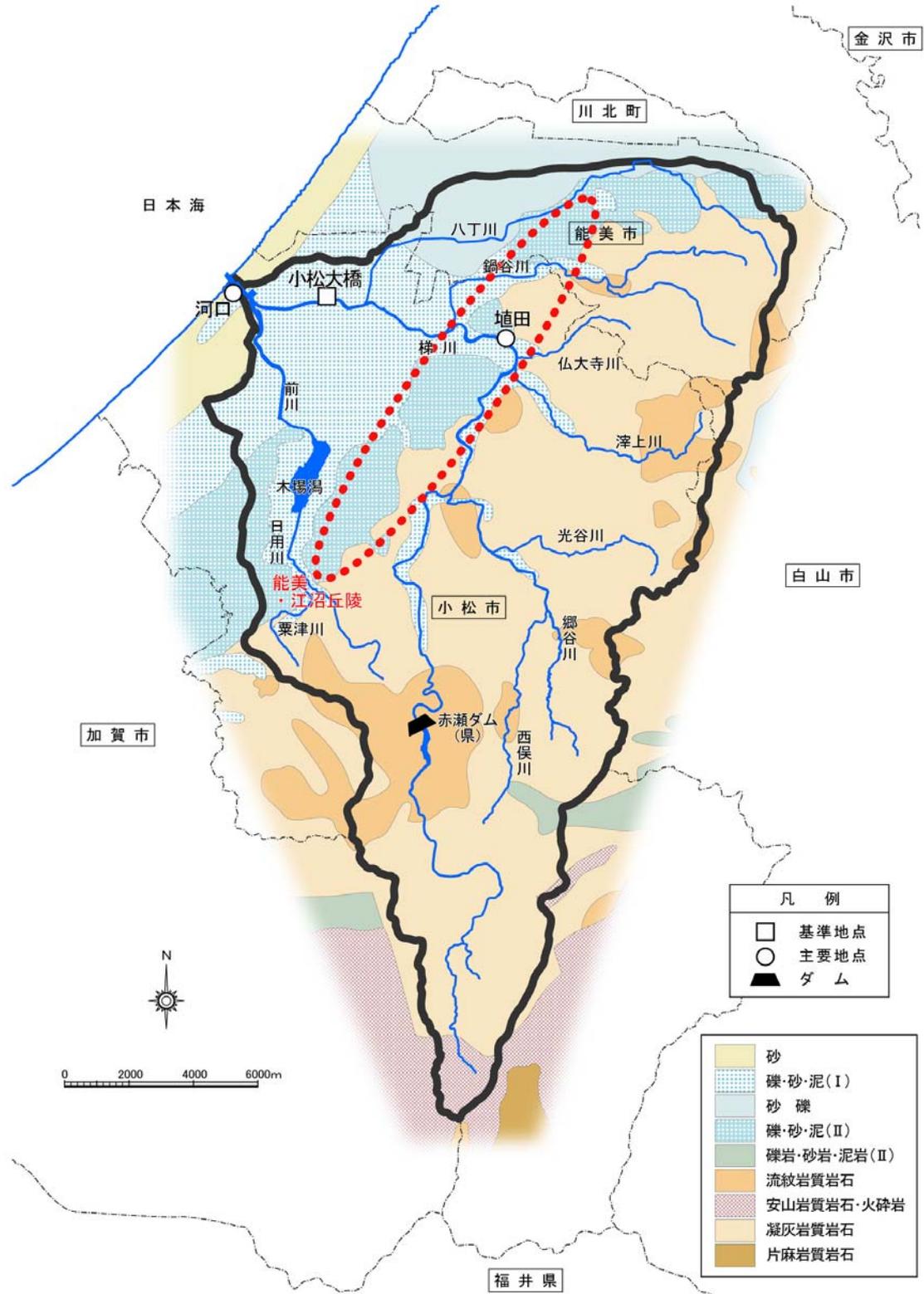


図 1-3 梯川流域地質図

出典：土地分類図（石川県）昭和 49 年 日本地図センター

1-4 気象・気候

梯川流域は、上、中流域の山地部と下流域の平野部に大別され、気候は、日本海型気候に属しており、日本海側特有の冬季に降水の多い気候となっている。

平野部の年間降水量は約 2,200mm(小松観測所(金沢地方気象台)：昭和 54 年～平成 17 年の 27 力年平均値)、山地部の年間降水量は約 2,700mm(尾小屋観測所：昭和 51 年～平成 17 年の 30 力年平均値)であり、地域によっては 5,000mm にも達する全国でも有数の多雨地帯である。

気温は、海に面していることと沖合に対馬暖流が流れていることから比較的温暖であり、小松観測所(金沢地方気象台)の昭和 54 年～平成 17 年の平均気温は 14.2℃となっている。山間部では平野部に比べ気温は 2～5℃低くなっている。

積雪については、海岸付近の平野部で 50cm 程度、山沿いの平野部で約 1m、山間部では 2～3m に達し、降水量の比較的少ない 4～6 月には融雪水として流出し河川流量を保つ。この特徴的な冬季の豪雪は、海からの湿った空気が白山を越えるときに起こる。

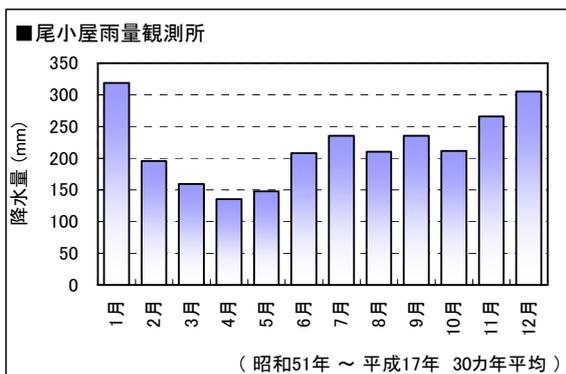
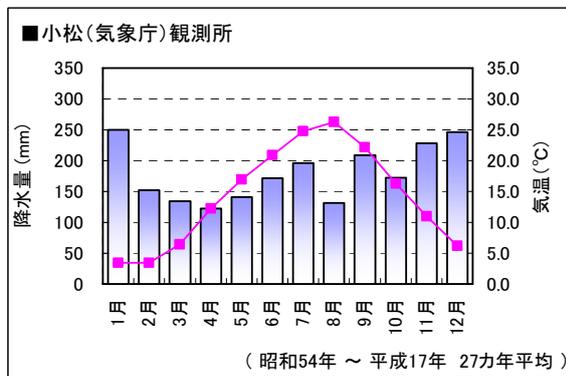
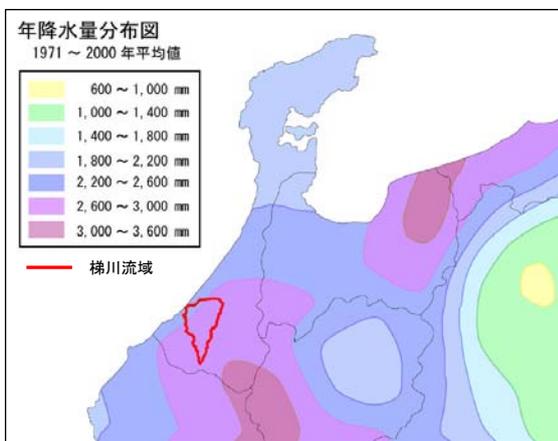


図 1-4 梯川流域内雨量観測所位置図